

「愛によって」 マルコ福音 1章 21-28 節

本日与えられたマルコによる福音書1章のみことは、そこに汚れた霊にとりつかれた人から、イエスがその汚れた霊を追い出された、という話が記されておりました。

なんとも不思議な話です。汚れた霊とは何なのか。オカルト的な話なのか。それは、現代でもどこかにいるのか。

しかしこれは、単なるオカルト的なお話ではなく、神さまが私たちに語りかけておられる、命の言葉、救いのためのみ言葉です。へりくだってみ言葉に耳を傾けたいと思います。

23 そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。24「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」

場所は、会堂。今、わたしたちもおります。会堂。ここです。教会です。礼拝をする場所です。み言葉を聴く場所です。今日の、この話の舞台は、会堂です。そこに神を礼拝しようと、人々が集っている。その時のことです。

そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。
その場所に、汚れた霊にとりつかれた男がいた、とあります。

今わたしたちが手にしているこの新共同訳聖書では、その時、とあります。これは、その場所にはじめから居た、と伝えております。

実は、ここは、もう一つ、別の受け取り方があります。
出だしの「その時」という言葉は、「するとすぐ」という訳もできるからです。
するとすぐ、その場所に、汚れた霊にとりつかれた男が現れた、という解釈です。
実際、そのように翻訳されている聖書はいくつもあります。

たとえば、こうしてわたしたちが今、静かに礼拝を守っている、その場所に、突然汚れた霊にとりつかれた男が入って来て、叫んだ、という状況です。

タイミングはどちらが本当だったか。分かりません。

新共同訳がしているように、そこにいたその男が、その時、叫んだのか。

それとも、礼拝をしているその時、イエスがみ言葉を語っておられる、その時すぐに現れたのか、分かりません。どちらもありそうな様子です。

ただ、ずっとその場にいたとしても、イエスが来られたのを見て、すぐに駆け付けたのだとしても、その汚れた霊にとりつかれた男は、イエスがそこにいると知って、やって来ました。そして、そのイエスに向かって、叫んだ。そのことは同じです。

その思いは、どこにあるのでしょうか。

そして、この汚れた霊にとりつかれた男は叫んだとありますが、さて、叫んだのは、汚れた霊なのでしょうか、それとも、汚れた霊にとりつかれた男のほうが、叫んでいるのでしょうか。

もしも、汚れた霊そのものが叫んでいるとすれば、イエスに対する敵対心からでしょう。

事実、そのせりふも物語っています。「我々を滅ぼしに来たのか。」なんて言っています。神の子と敵対する悪魔の立場でものを言っていることがうかがえます。

そう考えると、ここで、突然、イエスに向かって、叫びをあげているのは、汚れた霊であると考えることができます。

でも、一方、汚れた霊ではなく、その汚れた霊にとりつかれた男がイエスを見て、すぐに立ち上がって、叫んでいる、いや、叫ばずにいられなくなった、ということも考えられます。「助けてください」という気持ちからです。「この御方なら、助けられるかも、」という思いからです。

あるいは、その両方が入り混じったものかもしれません。・・・神の子イエスと聞いて、馬鹿にしている思い、敵対する思いを持ちつつ、同時に、心のどこかに、ひょっとしたら、そこには何か真実があるのでは、救いがあるのでは、とすがる思い。

みなさんの中には、そういう両方が入り交じった思い、ないでしょうか。

わたしは誰にもあると思います。私の中にもあります。百パーセント信仰に満ちている、なんてことはありません。

信じる気持ちがあり、同時に、疑う気持ちもいつでも芽生えます。

信仰という角度で考えなくても思い当たることがあります。

心のどこかで、真っすぐに生きたい、嘘偽りのない生き方をしたい、と思っている。思っているけれども、本当に、嘘偽りない、真っ正直な、まっすぐな生き方をすることになるとしたら、一歩引いてしまう。そういう矛盾をわたしたちは抱えています。

たとえば、非行に走っている子供たちがいる。わざと悪いことをしている子供たち、青年たちがいる。でも、そんな彼らも、実は、心のどこかで、ちゃんとしたい、ちゃんとしたほうがいい、と思っているものです。

だけど、本当に、ちゃんとした生き方をする自分に変わっていくのを、恐れている。

そういうこと、子供や青年に限らず、大人になっても同じような思いを抱えながら、矛盾した両面を持っているのがわたしたちなのではないでしょうか。

あるいは、こんな状態も考えられます。神さまへの信仰はある。神というお方がおられることは信じている。

でも、その神様が怖いと知っているという状態。

その場合、やはり神様を求めて、礼拝に来る。聖書も読む。祈りも捧げる。でも、心に平安があるとは限らない。むしろ、神さまに裁かれるかもしれない、とびくびくしながらの信仰生活というものもあります。

マルティン・ルターもその一人でした。

ルターも、信仰を始めました。修道院に入るほど、本格的です。今で言えば、神学校に行く。牧師を目指す。自分の人生は、すべて神さまのためにと決断した、ということ。

でも、ルターさんは、はじめはただ神様が怖かった。怖いから、救いを求めた。すがりほどの思いを持っているけれど、同時に、神さまが怖い相手であった。

今日の個所、その日、会堂にわざわざやって来て汚れた霊、汚れた霊にとりつかれた男。考えれば考えるほど、実は矛盾している。

でも、それは矛盾ではなく、わたしたち人間の姿、そのものなのかもしれません。

汚れた霊にとりつかれた男は、こう言いました。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」

我々と言っています。ひとつではないようです。いろいろなものが入り込んでいる。

あれこれの思いが渦巻いて、ひとつに定まらない状態。まるで砂漠の中を歩いているような状況にすらなるわたしたち。迷える羊のようにさまようわたしたち。

そんな姿が、この矛盾を抱える、汚れた霊にとりつかれた男に見ることができるのではないのでしょうか。

そんなわたしたちの中にあるものを、追い出すことができるのは、ただお一人、神の子イエス、救い主イエス・キリストです。

そこにしか、ありません。いや、それをできるからこそ、この御方は、救い主、神の子です。それができないなら、ただの人です。わたしたちと同じ。この世のものとなります。

皮肉なことに、汚れた霊は知っていたようです。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」

人間たちが、疑いの心、不信の心を携えて、なかなか素直に信仰を心にいただくことができない間に、汚れた霊のほうは、イエスを見て、正体を知っていると仰いました。本当に知っていたのでしょうか。

でも、イエスさまは、それをおほめになりはしません。

知っているからと言って何もならないからです。

それはちょうど、「クリスマスは何の日ですか」「はい、イエス・キリストの誕生日」と知っていたって、信仰とは無縁であって、救いにならないのと同じです。

ただ美味しいケーキを食べたり、パーティーをしたり、その場だけの賑わいをするだけです。まことの救いを味わいしません。

本当に知っているというのは、まず救い主が必要な自分であること、つまり罪深い自分であることを知ることで。

私の中には、さまざまな矛盾がある、深い罪がある。誰にも言えない闇がある。

そのわたしをだれが救ってくれるだろうか、と悩み、悩み、そこから、本当の救いを求めること。求めて、求めて、その結果、じゅうぶん信じきれないけれども、百パーセントの信仰なんて言えないけど、でも、神さまにゆだねてみよう、信じてみよう、お任せしてみよう、と、思って、信仰の決断をしたときに、初めて、救いを知ります。救われた喜びを味わいます。これは知識では手に入りません。

わたしたちがいかにあれ、神は私を愛しておられる。「そのままがいい、そのままのあなたを愛している」「わたしはあなたを救う、心配いらぬ」と言われる神さまに、すべてをお任せする・・・それは、知識ではありません。知っているということではありません。

むしろ逆です。「わたしは知らない、でも、神が知っておられる」「母の胎に宿った時から、神は、私を見ておられた」ということを知るのです。

その時、自分の中にあつたさまざまなものから解放されます。

多くのものから解放され、ただひとつ、愛なる神に、すべてをお任せしようという信仰だけになります。

ルターさんも怖い神様ではなく、「この神様は、私を愛しておられる、その愛によって、わたしを救ってくださる御方だ」と知って、救われました。

あの日、汚れた霊にとりつかれた男が会堂に来た。そして、癒されました。イエスさまによって。神の愛によって。

わたしたちも、今日、会堂に来ました。イエスさまは、あなたを救われます。愛しておられるからです。わたしたちがたとえ、心にどんな闇を抱えているとしても、わたしたちを救ってくださいます。あなたを愛しておられるからです。

これからもこの会堂に来ましょう。イエスさまを礼拝するために。救いに与かるために。

そして、あの日、会堂で大いなる救いが起こったように、この松橋教会でも、これからも主のみわざが行われるように。ここで、救いを味わう方々が、ひとり、またひとりと与えられていくように、ご一緒に祈り続けましょう。